研修名	乳児保育・教育　幼児教育・保育
	平成３０年２年１３日（火）　１３：３０～１６：００
講　演	「保育・幼児教育の意義
	～子どもを主体として受け止めるとはどういうことか～」
講　師	京都大学大学院　大倉　得史　氏

１　講演要旨

１）　新指針の掲げる力の育成を第一目標にしない

① 新保育所保育指針（平成３０年度より適用）の中の『幼児期の終わりまでに育ってほしい姿』＝『望ましい１０の姿』は、質の高い工夫された保育実践をしていれば、自然と得られる結果であり、副産物である。

② １０の力の育成を第一目標に据えていると、「〇〇が出来ない子」「〇〇の力が欠如した子」という見方に傾き、子どもへの関わり方に歪みが出てきてしまう。

２）　主体としての心を育む

① 主体…自分の思いを持って自分らしく、周囲の人と共に生きる存在
主体としての心…人が主体として生活しているときに、その人の内側から自然と沸き起こってくる「～したい」「～をしよう」という気持ちの動き

② 主体としての心とは、
A）「私は私」の心…自分の思いを持って自分らしく生きる
B）「私は私たち」の心…周囲の人と共に生きる
のA）とB）の２側面を持っており、どちら共にバランス良く保たれていないと生き生きとした気持ちの良い生活が送れない。

③ 両面の心をしっかりと備え、そこに自分なりの折り合いをつけていけるような人間を育てていくことが必要となる。（保育の一番の目標）

３）　主体の心を大事にすれば自然と力は育つ

①力の育成に重きを置き過ぎると、大人が設定した目標ラインに届かせる、一方的な保育になってしまう⇒「させる保育」・「褒めて頑張らせる保育」・「見せるための保育」

②行動や能力を仕込むスタンスでは、心は育たない。

③大人からの「〇〇がある子、ない子」という評価的な眼差しを受け続けていると、主体なりきれない子どもが増えていく。

④指針の掲げる目標をまっすぐ目指すのではなく、何よりも子どもの主体としての心を大事に保育をしていく。
⇒自然と１０の力は育ち、実現していく

４）　主体としての心を育むための関わり

① 子どもは一人の主体として受け止められることを通じて、本当の意味での主体となっていく。
⇒「養護的働き」と「教育的働き」を一体のものとして展開していくことが重要
A）養護的働き…何よりも子どもの思いに寄り添い、子どもの気持ちを受け止めていくこと

B）教育的働き…保育者の思いを伝えたうえで、子どもを誘い、導いていくこと（自分で気づき、どうするべきなのかを考えられるような誘いかけをすることが大切）

②A）とB）の働きを一体のものとしてバランス良く展開することで、その積み重ねにより初めて主体としての心は育って行く。

5）　養護的働きと教育的働きの諸様相

① 代表的な養護的働きと教育的働きのいくつかあるが、それらを組み合わせ、応用・発展させて、目の前の子どもそれぞれにふさわしい関わりを探っていくことが重要である。

② 養護的、教育的働きがいずれの時期においても必要になり得る。

③ 一人一人の子どもの姿に応じてどの働きかけが必要かは、変わってくる。
⇒子ども一人一人の育ちの過程に寄り添った保育をしていくことが大切である。

2　感想

今回の研修は、自分の今の保育のやり方は、本当に子どもを主体として進められているのか、ということを改めて考える良い機会となりました。特に、保育者が一方的に子どもに要求していく「させる保育」、「大人が設定した目標ラインに届かせる保育」になってしまっているのではないかという部分には、自分も当てはまる所があると思います。しかし、子どもの力は、主体としての心を育む実践の中で、自然と身についていくということが今回の研修でよくわかりました。子どもにかける言葉の重要さは、日々保育をしている中で忘れがちになってしまっているのではないかと思います。保育の中で大切にしなければならないことを思い出しながら、今回新たに学んだことを、自分の保育に生かせるように日々、子ども達と向き合い、関わって行きたいと思います。

（記録　梅美台こども園　山岡　千絵）